【様式１】

概 要 書

研　究　名	震災により復旧が必要な古民家の漆喰壁修復技法の構築とその技術資料の作成
民間機関等 (相手方)の名称	有限会社　　高定左官
研究の概要	近年、建築分野においては「湿式工法（施工方法の中で水の使用を含む工法）」の衰退、「乾式工法（施工方法の中で水の使用を含まない工法）」の普及により、左官業そのものの需要が減り、左官職人が少なくなっている。「湿式工法」の施工性、コスト等を考えると、乾式工法が近年の住宅等には多く用いられている。 「農家型長屋門を持つ古民家」においては、昔ながらの伝統的工法が使用され、古民家外壁や内壁、また敷地内土蔵には漆喰壁が用いられている。この歴史ある建築物を維持するには、大変費用がかかる。宮城県栗原市地域の過去 10 年間を振り返ると、震度の大きな地震としては、2003 年・宮城県北部地震、2008 年・岩手・宮城内陸地震、2011 年・H23 東北地方太平洋沖地震を含む計３回の地震があった。 その間の建築物への被害、経年劣化などにより、破損した漆喰壁をそのままにする所有者が増えている。所有者の高齢化や多額な修復費用のため、修復できずにいる現状がある。 そのため、「湿式工法」の経験がない職人でも漆喰壁修復が可能にするための技法を構築するため、万能圧縮試験器を用いて圧縮強度試験を行い、どのような技法が修復に適しているのか研究する必要がある。併せて、漆喰壁修復作業に従事する際に用いる教材及び技術資料を作成する。 研究の最終年度となる本年度は、土蔵土壁における春期・秋期の土壁圧縮強度試験を行い、Ｒ２ 年度のデータと合わせ、春夏秋冬の温湿度の違いが土壁の強度差に与える影響をデータ化する。併 せて、過去 4 年間に製作した土壁圧縮業と試験結果を活用し、土壁強度の経年比較結果をデータ化 することにより、土壁修復に最も適した技法の構築を目指すこととした。